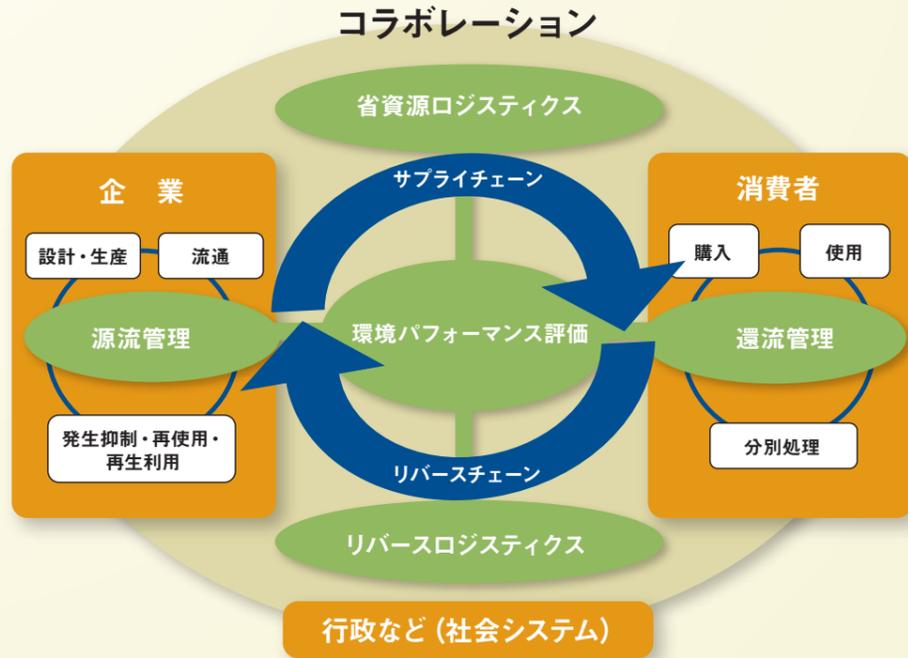


地球温暖化や廃棄物等の環境問題を解決するためには、循環型社会の実現が不可欠であり、そのためにはロジスティクスが重要な役割を果たします。CGLでは、ロジスティクス・グランドデザインを作成し、このグランドデザイン実現に向けた活動を進めております。

図表 循環型社会を実現するロジスティクス・グランドデザイン



調達、生産、流通、消費の諸活動とそれらの過程を経て発生する廃棄物の処理の行為は、環境汚染や環境破壊など、環境に対して様々な負荷を与えます。私達の世代は健全な地球環境と社会環境とを(人類生存の大前提である)最も重要な財産として、将来の世代に引き継ぐ責務を有しています。その責務を果たすべく、ロジスティクスにおいても、環境への調和、環境との共生、環境改善への積極的貢献、を最優先に考えねばなりません。

ロジスティクスには、再使用や循環などの視点に加え、素材の選択や廃棄物の処理のあり方まで視野を広げ、環境への負荷に適切に配慮しつつ、費用対効果を最適化することが必要です。

JILSは21世紀の循環型社会における、ロジスティクス活動のあるべき姿として「環境と調和した循環型社会を支えるロジスティクス」を提唱します。循環型の経済活動を、ロジスティクスを通じて実現したいという思いを込めて、「循環型社会を実現するロジスティクス・グランドデザイン」を提案します。

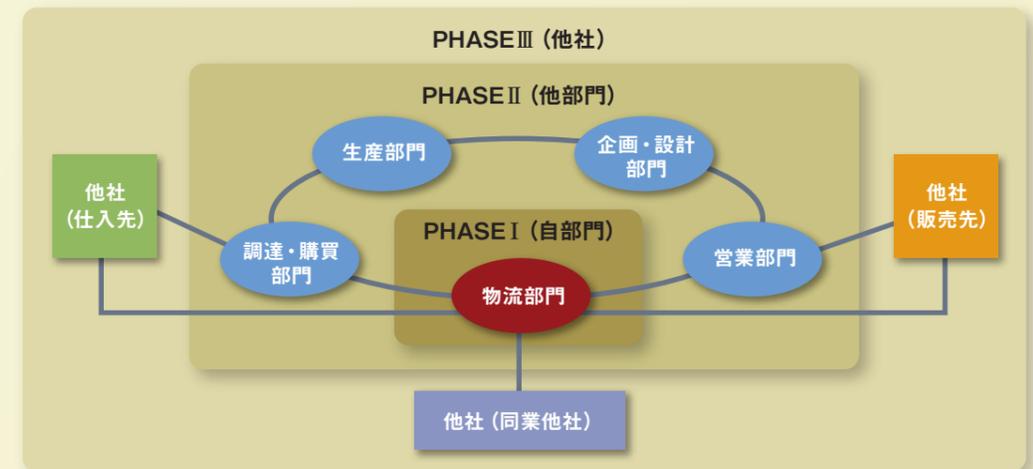
(第1期CGL 第1回本会議 / 2003年11月13日)

ロジスティクス分野における環境負荷低減を進めるためには、物流部門の業務範囲内のみの検討でよいのでしょうか。たしかに、物流部門だけでできる部分も少なくありませんが、より効果を出すためには、自社の他部門や取引先等の他社との連携が必要です。

例えば、P7の事例⑤で考えてみましょう。もしA社物流部門が「営業部門やB社から指示されたとおりの作業をこなすのが物流部門の使命」としか考えていなければ、荷分かれの発生による包装材の増加といったことは、「我々物流部門ではどうすることもできない」と判断し、何も実施しなかったでしょう。しかしながら、この事例では、物流部門で「これは環境負荷の増加につながっている」と認識するとともに、当該事象の発生要因となっている、営業部門やB社に対し改善提案を行った結果、リードタイムの延長による包装材及び配送におけるCO₂削減につながったのです。

したがって、物流部門では、環境負荷の増加につながっている事項への“気づき”とともに、当該環境負荷の増加要因となっている他部門、他社への問題提起や対策案の発信といった役割が求められるのです。その際に、物流部門の業務範囲での部分最適のための提案ではなく、下図のような他部門や他社を含めたより広い視点が必要となります。

図表 取組主体の拡大 (PHASE I→II→IIIへの拡大)



【コラム】 物流部門は全社のセンサー

荷動きがなく山積みされた商品、返品された大量の商品を入れたカゴ車、商品寸法のわずか数センチの差でもう1箱積み込めないトラック、まぎらわしい商品コード…、皆様の会社の物流センター等でこのような光景を見かけることはありませんか？

物流部門自らが行った業務が原因で発生する場合がありますが、調達、企画・設計、生産、営業部門等の他部門や他社が行った業務の影響が、物流部門で現れるケースも多いのではないのでしょうか。しかも、一番最初に

物流部門に影響が及ぶケースや、物流部門のみに影響が出るケースも存在します。



では、我々物流部門は、「自部門ではどうすることもできない」といって、それらを放置しておいてよいのでしょうか。そうではありません。我々物流部門では、通常と違う事象や非効率な事項に気づいた場合、できるだけ早く該当部門へそれらを発信する必要があります。物流部門は、言わば、“センサー”としての役割が求められているのです。